

# 高次脳機能障害者の将来を 視野に入れた連携の重要性

—それぞれのステージで大切な支援とは—

目白大学大学院リハビリテーション学研究科

會田玉美

[aida@mejiro.ac.jp](mailto:aida@mejiro.ac.jp)



會田 玉美 目白大学 保健医療学部  
大学院リハビリテーション学研究科

博士（保健科学）作業療法士、産業カウンセラー、剣道四段

都立病院23年勤務のあと現職

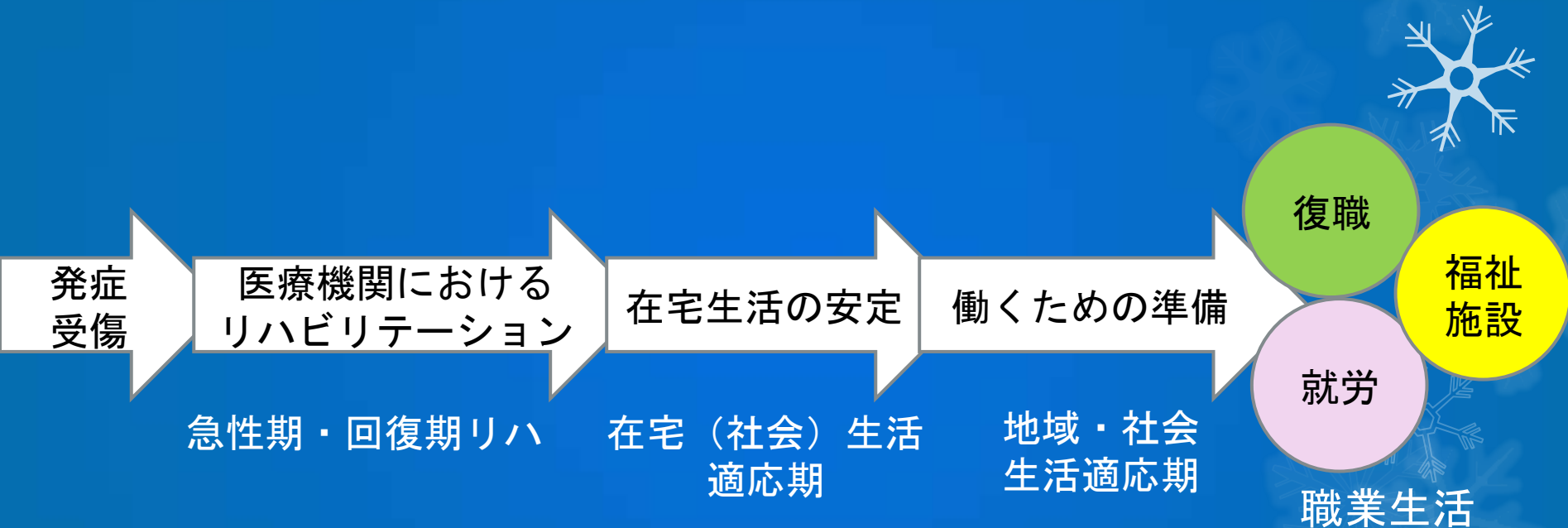
研究分野：職場マネジメント  
高次脳機能障害の就労支援

科学研究費助成金（平成26年～平成28年）

「高次脳機能障害者の医療福祉連携を促進する職業リハビリテーション計画書」

一般社団法人コミュニティ・ベースド・リハビリテーション協会  
就労移行支援事業所 Beech（板橋区）  
主として高次脳機能障がい者の就労移行を担当

# 高次脳機能障害のステージごとの 支援の重要性



東京都福祉保健局：高次脳機能障害のある人の就労支援事例集（職業準備性を高める支援を中心に）  
より引用・編集  
<http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/shinsho/tosho/hakkou/pamphlet/syurojirei/files/syurojirei.pdf>

# 記憶障害のY氏



弱み  
高次脳機能  
障害の重複

- Y氏 55歳 営業職 くも膜下出血＋水頭症 重度の記憶障害、注意障害、多動、健忘失語、臥床による廃用症候群
- 日動生活動作の向上を目標に作業療法の処方
- 一人歩きは転倒の可能性あり、自分の部屋に帰れなくなってしまう
- 「私はどうしたらいいのでしょうか」
- 「あれっ！これはどうしたんだろう」
- 「親父はどうしたっけ？」

弱み  
自覚の  
なさ

**強み**  
手続記憶  
ブラインド  
タッチ  
(経験)

- メモリーノートを作成、それを使用できることを目標
- 幼いころから今までの本人に関する記憶を家族から情報収集し、ご本人にパソコンで打ってもらったものを「〇〇覚書」としてメモリーノートにファイリングする。
- パソコンを打つことはできるが（手続き記憶）それ以外の約束事についてはパソコンのそばに貼ってあっても読まずにたずね、作業は集中が続かないため2行程度である。
- ゲームのように面白いものなら続くのかと試みたが、ルールを覚えられないのですぐ飽きて歩き回ってほかの人に声をかけたり友達になる。
- 義理の兄がつきっきりで世話、ゆったりした妻

5 **強み**  
良い支援者  
(環境)



**強み**  
親しみ易く  
人に好かれる  
性格

強み  
手続記憶  
剣道  
(経験)

強み  
人柄  
自己効力  
意欲  
体力向上

- 家族からの情報の中に、小・中・高と剣道をしていた。
- 作業療法の時間に毎日竹刀を振ったり切り返しをしたりしているので患者さんたち、職員などから「剣道をする患者さん」と有名になり、みなさんにほめられ人気者になった。
- ふらつきもなくなり、それと同時にパソコンの前に座る時間も少しずつ増えていった。今ではノート片手にさっそうと中途障害の作業所に通い、趣味の史跡巡りをしている。ノートを使いこなし、今ではもう数十冊になった。
- たまに犬の散歩をしたのをわすれてまた散歩に出かけ、犬が疲れてしまうそう。
- 作業所で一番好きな種目は畑仕事

強み  
元営業職  
(経験)

「高校時代に一緒に剣道をした同級生」



私の反省点：外来通院・作業所に通う以外の時間の過ごし方、今後どうしていきたいか、人生設計  
医学モデルの考え方→治せる症状がなくなるとやる事がなくなる？

# 高次脳機能障害 急性期・回復期におけるリハの重要点

- 強みと弱みを把握する
- 強みを活用する支援
- 体力的強化
- 日常生活の自立・生活リズム
- 人柄、経験を活用する
- 身近なよき支援者の存在（ごく一般的な環境を強みに）
- 将来の生き方を考えた複数の連携

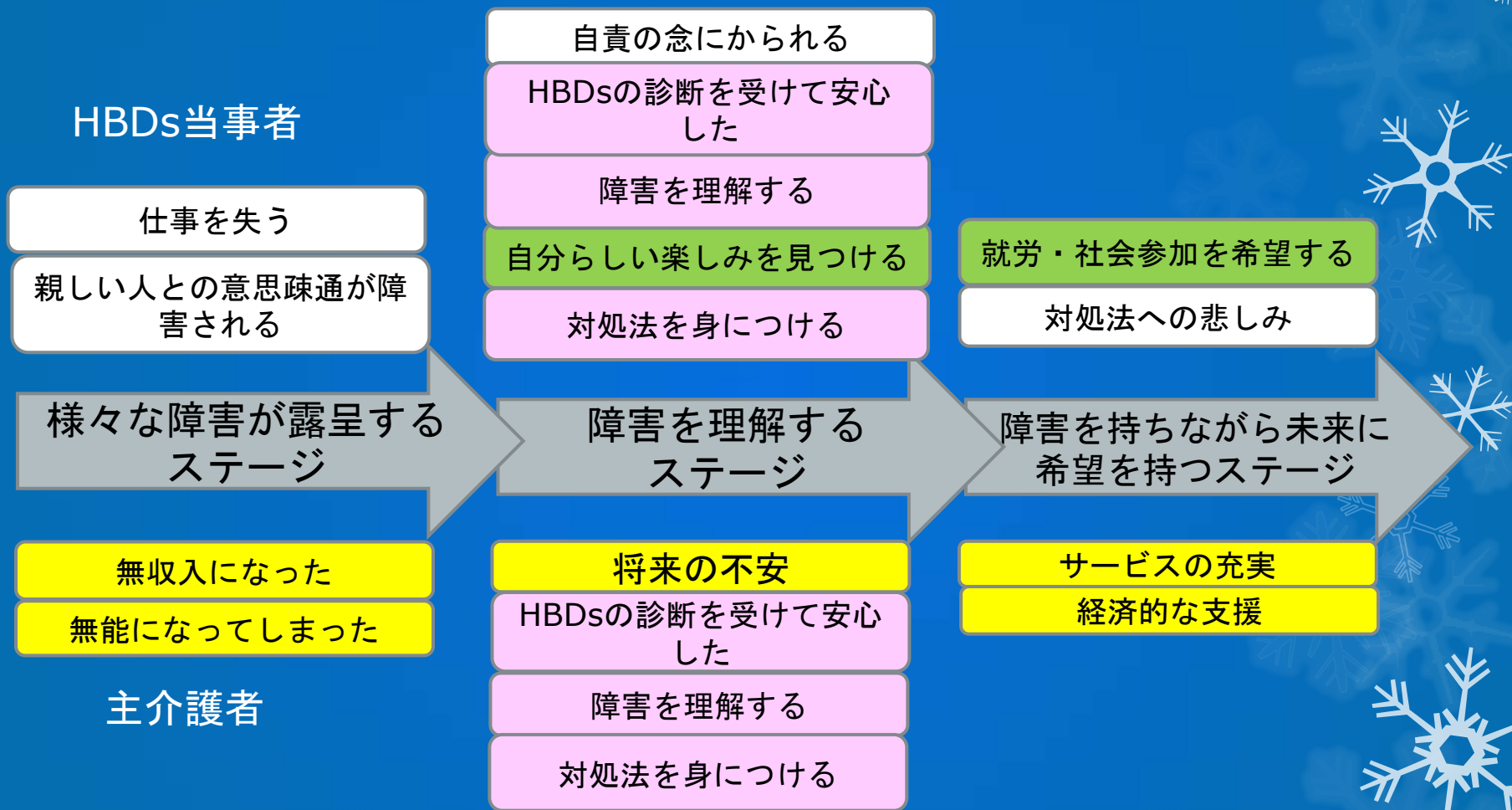


# 高次脳機能障害 在宅生活適応期

- 入院している時には気づけなかった問題に直面
- 当事者と主介護者の適応プロセスの違い
- 当事者にとって障害は「意思疎通の障害」
- 主介護者にとって障害は  
「仕事や収入を奪い、将来を狂わす障害」



# 高次脳機能障害当事者と主介護者が地域社会に適応するプロセス



# 高次脳機能障害 在宅生活適応期におけるリハの重要点

- 障がい、自分の能力を自覚する
- 日常生活の自立・生活リズム
- 集団に参加し、良い人間関係を作れる
- 障害に対する対処法を身に付ける
- 自分らしい楽しみを見つける
- 複数のサービスを利用する
- 当事者の会・家族会の重要性

この時期は重要な時期

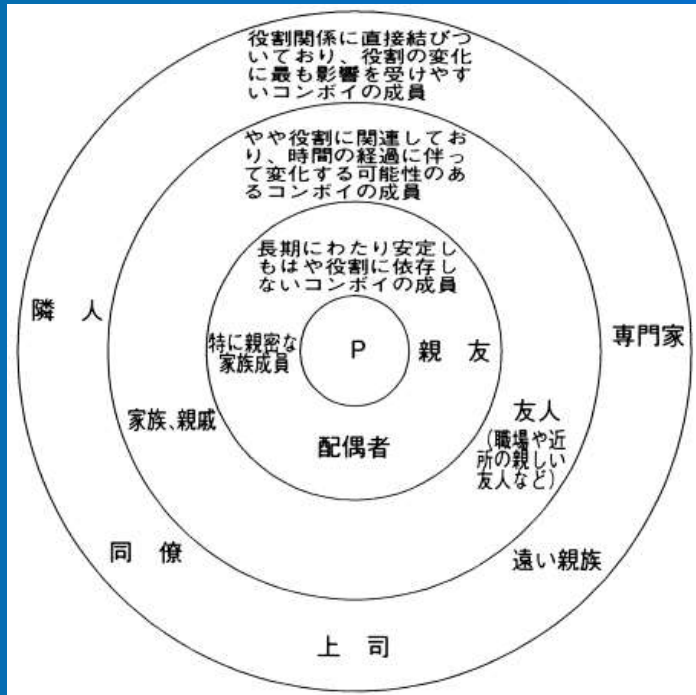
- ご本人のアイデンティティと障害を負ってからの人生の連続性を確認したい時期
- 夫婦のアイデンティティの危機（獲得か拡散か）

→今後の人生に重要

## 結婚の最大の利点は何か

男女とも第1位は「精神的安らぎ」  
男性は35歳以下は第2位「社会的信用、周囲と対等」第3位「現在愛情を感じている人と暮らせる」35～49歳は第2位「経済的余裕」第3位「社会的信用、周囲と対等」  
女性は35歳以下は第2位「現在愛情を感じている人と暮らせる」第3位「自分の子供や家庭をもてる」女性35歳から49歳は2位「経済的に余裕がもてる」3位「社会的信用、周囲と対等」

厚生省人口問題研究所「第10回出生動向基本調査」より引用



コンボイの仮説的な1例 (Kahn, R.L. et al. 1980より)  
 嶋崎尚子：ライフコースにおける結婚の意味「ノーマライゼーション 障害者の福祉」第16巻 通巻183号1996

役割アイデンティティ（妻・母・主婦）はライフステージによって変化する。  
 主婦アイデンティティは夫婦間の分業が進んでいる場合、ライフステージが上がった場合、夫の家事分業が少ない場合に高い  
 母アイデンティティは子供が小さいほど高い  
 妻アイデンティティはライフステージが低い場合、夫の情緒的サポート、レジャー同伴が高い場合に高い  
 また夫の情緒的サポートはライフステージが上がるほど少なくなる調査結果もある

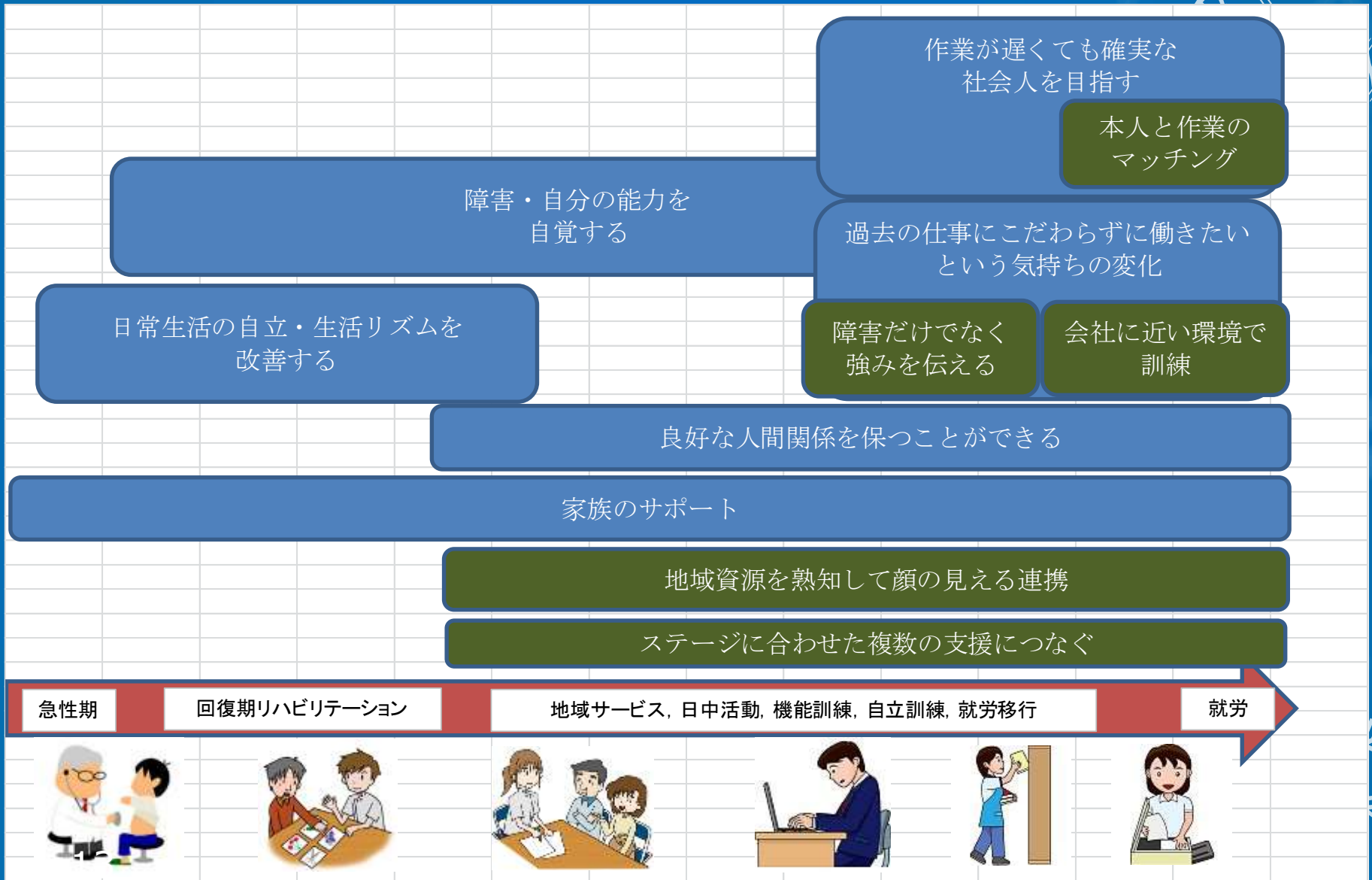
永井暁子：妻アイデンティティと夫婦関係  
 総合都市研究第56号113-120 1995より

またこの時期は人それぞれに身につけるべきことがたくさんある。  
 それを支えるのは複数のサービスとそれぞれの場所で良い支援者がいて、情報を共有し合うことが大事。  
 引っ込み思案にならないで支援者を増やす。  
 良い関係を増やす

# 高次脳機能障害 地域社会生活期

- 職業リハビリテーションに取り組む
- 本人の希望と本人の能力と仕事のマッチング
- 社会人として身につけること
- 進路変更
- 就労の継続
- 家庭生活の継続

# HBRsの職業リハビリテーションを促進するプロセス

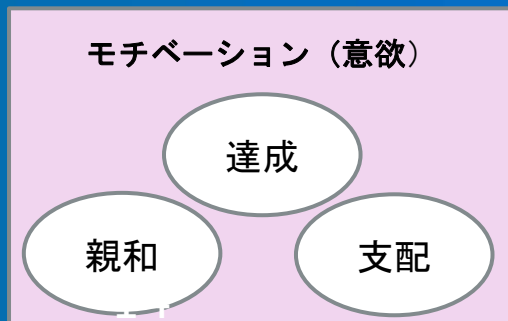


AIDA T. et.al : Title: Processes which promote Vocational Rehabilitation among Clients with Cognitive Disorders: A Qualitative study on the basis of interviews for professionals engaged in Vocational Rehabilitation

Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity 2015 発表予定

# 高次脳機能障害 地域社会生活期の リハにおける重要点

- 社会人としてのスキルと自覚
- アイデンティティの獲得
- 仲間に入れてもらえる、助けてもらえる関係を作る
- 家族のサポート
- 顔の見える、複数の連携、頼る人を明確にしておく
- 周囲に良い影響を与える人になる

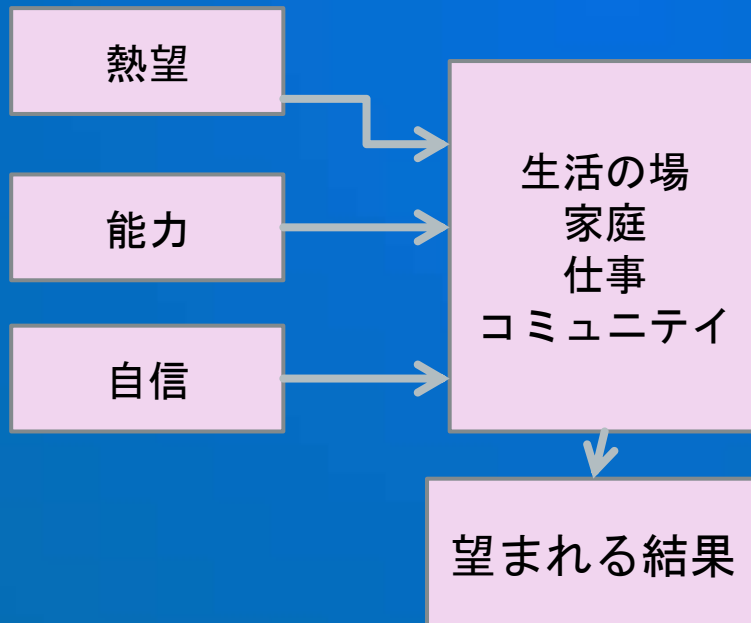




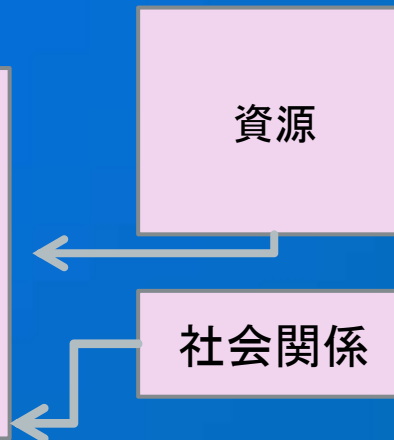
# 高次脳機能障がい者の支援で 重要と思われること

- 将来を視野に入れること
- ステージの推移に伴い、医学モデルからストレンクスモデルへの移行

個人のスorenクス



環境のスorenクス



チャールズ・A・ラップ他：  
ストレンクスモデル，59-61，2014 より



# 高次脳機能障害を持つ方のリカバリーの段階

カタナ・ブラウン：リカバリー，坂本明子訳.2012を参考に演者編集

## 意思表示

障害があるという自覚  
希望とモチベーション

## 基本的機能の回復

日常生活動作の自立  
健康的な生活リズム  
良い人間関係を保つ

## セルフエンパメントの回復

代償手段、障害への対応の獲得  
助けてもらえる、仲間に入れてもらえる関係

## 学習と自己の再評価

障害、自己の能力を理解する  
どこを助けてもらいたいと言える  
新しい自己の開発

## QOLの向上

幸福感，安定感，目的に向かって努力する  
他の人の手本になる

### リカバリーモデル：

利用者にとっての回復を，疾患や障害そのものの改善ではなく，疾患や障害があっても健康な面を活かして人生を主体的に歩もうとする利用者の意識変化の過程である

西尾雅明：包括的地域生活支援. Schizophrenia Frontier vol.II No.3 2010

# まとめ

- 急性期・回復期リハでは、強みと弱みを把握して強みを活かした支援をする。障害を改善することを目標とせず、将来を視野に入れた目標をたて、複数のサービスにつなぐ
- 在宅生活適応期には、生活の安定とともに集団に参加して良い人間関係を作る、自分らしい楽しみを見つける、当事者家族のアイデンティティの危機を認識し、複数のサービスやピアカウンセリングを促す
- 地域・社会・家庭生活期は障害をよく知り、助けてもらうことができる、障害を持つ前と変わってしまったが、今の自分に誇りを持つことができるようにストレングスマodelでサービスを連携する
- 高次脳機能障害を持つ方がたのアイデンティティを損なうことなく、障害を持つ以前と現在・これからをつなぎ、どのサービスの支援者もその人らしい人生が理解できるようなパーソナルガイドを作成したいと考えている

ご清聴ありがとうございました

會田玉美 aida@mejiro.ac.jp